

山形・西川 仙山カレッジフォーラム
地域の情報力発信力向上を
(2024 年 12 月 15 日 河北新報・3 面)



地域活性化と情報発信をテーマに開かれた仙山カレッジ

山形・西川 仙山カレッジフォーラム

地域の情報発信力向上を

PRの在り方考える

宮城、山形両県にまたがる仙山圏をモデルに広域連携の在り方を考える仙山カレッジ（河北新報社主催）の第42回フォーラムが14日、山形県西川町の西川交流センター「あいべ」であった。地域活性化と情報発信「アピール」から脱却し、PRの在り方を考えるというテーマに意見を交わし、約100人が聴講した。山形開催はコロナ禍に伴う休止を挟んで5年ぶり。基調講演で西川町長の菅野大志氏は、町が首都圏や仙台圏、若者や富裕層に関係人口拡大のターゲットに設定していると説明。広報

を行う際の留意点として「目的や、対象を誰に、どの世代に、どの地域にするかを、しっかり考えるべきだ」と強調した。パネル討論では、山形県天童市在住のローカルタレント、ミッチーチェン氏が、両県で「あがすけ」「おだづもっこ」など目立つ人を

喜ばない意識があると指摘した上で「批判をはねのけ『あがすけ精神』で地元をPRすることが必要。発信する側はタフでないといけない」と呼びかけた。仙台市在住の広報PRプロデューサーで元東北放送アナウンサーの名久井麻利氏は「PRとは情報を受け手にメリットがあるよう広



報すること。『こういう課題を解決する』『こう役に立てる』と発信をするとき、え方が変わる」と語った。カレッジ座長で宮城学院女子大教授の宮原育子氏は「広報はつながることがキーワード。コロナで分断が3年続いた。隣県交流でも、もう一度つながりを大事にしていくなが必要がある」と話した。（25日の朝刊に詳報を掲載します）